
ねこねこねこ - 人形師 源十郎 -

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこねこねこ - 人形師 源十郎 -

【Nコード】

N9869C

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

人形師源十郎に登場したサブキャラ達の日常

或る日常

それは、初めて彼女に与えられた栄誉だった。数ある中から彼女が選ばれたのだ、それは誇つてよい事だった。

だから、彼女は誇らしい気分とともにその任務を受け入れたのだった。

*

「…餌だ」不承不承と言うような感じで男は犬小屋の前に餌皿を置いた。餌皿に盛られたその内容は犬にはあるまじき豪華な内容ではあった。

「わん」しかし、動物にあるまじき甘ったるい声で彼の目の前に現れたのは犬では無く、首輪をつけた女だった。あらわれた彼女は従順に次の指示を待っているようであった。

「…何度も言うが、せめて動物形態で出て来てくれないか」それは要請と言うよりは懇願に近いため息だった。

「わん」それへの返答は次なる要求だった。「…良し」ため息をつきつつ不承不承といった呈で男がぼそりと言うと彼女はためらうことなく、というよりも嬉々としてその美貌を餌皿に突っ込むと、食餌を開始した。

「主様、お茶が入りました」そこに、つ、と静かではあるがよく通る声が背後から響く、声の主は目の前で展開される光景に動じた風もなく爽涼として己が役目を果たす。

「マスター、お早う御座います。って^{なま}風姉様、それは私の役目です。それに葉月も、あいも変わらず何やってるんですか、そんな事やっているからマスターの評判が悪化するんです」と言いつつその身体には不釣り合いな制服を着た少女が慌てた様子で、外靴を履いて、縁側から庭に出ようとしたところで、足元で急速に盛り上がった土饅頭にけつまずいた。

「おゝはようございますですう、清々しい朝ですう、今日も元氣イッパツ、張り切ってイキましよう」^{その}地面土饅頭から器用に上半身だけを出したメイド服の女がのほほんとした声を発し、目の前で顔面から突つ伏す少女を見て一言「…神無ちゃん、何を地面に呑気に寝て居るんですか？ …^{ストイラフ}縞縞パンツですか」とか^{けんいん}加害者の自覚の無いことをのたまう。

制服のスカートを抑えて顔を真つ赤にして、文句を言いかけた少女の横を全身をフードで覆った怪しい人影が「おやすみ」と気怠げな声を、手に持った携帯ゲーム機のボタンをそこだけはせわしく動かしながら通り過ぎようとして、その襟首を少女につかまれる。

「シェリルっ！！ そんな格好で朝帰りとかしないで下さい、あなたたちのせいで、ご町内の皆様方にどれだけの^{わだい}娯楽を提供している事やら」

「あゝ、もうっ！ 源十郎様も、なに諦めきつたため息ついているんですかつ、しっかりして下さい」

「だゝからシェリルっ、^{ローフ}外套引きづったまま^{なか}家に入らないで、掃除がああああ」

その傍らでは、「主様、襟が曲がっておられます」と緋の袴を履

いた長身の巫女がかいがいしく男の世話をやいていた。

「あ~~~~、^{なき}凧姉様、だから、それは私の役目ですってば」

それはありふれた日常の光景ではあった。どんなに近所のおばさま方の好奇の視線にさらされようと、それが彼らにとっての日常の光景であった。

家の中 1

秋の柔らかな日差しが射し込む部屋いえの中、気づくと闇のわだかまりが落ちていた。時刻は夕暮れとも言って良い日差しがそよぐ、午後の事だった。久々に彼、能登 源十郎は一人、落ち着いた時間を過ごしていた。

不意に部屋の温度が下がり、どこからともなくおとろおとろしい音楽が流れ出る。

そいつは闇の中で不気味に光る瞳にゆるやかな殺気を宿し、地の底から響くような、と本人だけは思っているらしき声を発した。

「みーたーなー……」それは、本人だけは恐ろしいと思っている気な、低く可愛い声を上げた。

「……ふむ」期待された目標かれの反応は、非常に拍子抜けするものだった。それを振り向いて、一瞥するなり、男は、そこには一顧だにせず彼は作業の続きを始めた。

ようするに、七輪でサンマを焼くという作業を。

「……みーたーなー、……みーたーなー、……みーたーなー」
「気を取り直したように彼の背後の小さな闇のわだかまりから再度、声がしつこく響く。

「……えーと、意外な反応ですが、ここでめげてはいけませんのです
ニヤ、みーたなあ」となにやら、その中で決意を新たにする声が響き、その闇のカタマリは彼の側へと移動してきた。

「コホン、えーと……みいーたーニヤー、じゃなく、……みいーたーな
ー、です。……ええと、これに応えてくれないと、非常に困るので
すのによ、……えとえと、話が先に進まないの、ニヤんか返答
を返して下さいですニヤ」そう言つて、闇の中から不満を述べなが
ら出てきたのは、小柄ながらも出るべき所の出た神無とは非常に対
照的な身体つきの一人の少女だった。その闇の中で人間ではない事
を表すかのように彼女の瞳が満月のように光る。

しかし、精一杯がんばっているような彼女には申し訳ないが、その頭の上で何かを期待するかのように揺れる茶色い猫耳と尖端の白いしっぽ付きの、その姿のどこをどうひっくり返しても可愛らしいという表現しか思い浮かばない。それに、その口元からは涎が垂れ、その瞳は源十郎では無く、明らかに食欲をそそる臭いを醸し出す秋^{サマ}の味覚に注がれ、それは、もうなんとういうか物欲しさが全身から滲み出していた。

その誘惑を振り払うようにして、猫耳がしなだれ、しっぽがうなだれたまま、とてとてと気落ちしたように闇の中に戻る少女は、しっこく同じ行動を繰り返そうとして、目標くだんの人物が、彼女をようやく諦めたという感じで見つめている事に気がついた。

家の中 2

「……見なかったという事にしたいのだが、な」

「ニヤ、発動条件完了ですニヤ。と、言うわけで呪怨発動開始、お命頂戴ですニヤ！」

「……やれやれ、だな」言つて喜色満面、目標^{かれ}に飛びかかるうとする少女に、おもむろに彼はそばにあったものを少女に向かって放り投げる。

「うにやつ！」つい、彼女はそれを捕まえ、ゴロゴロと喉を鳴らしてしまった。

「にやにやにや！？ にやーにやー」

そうして、男は我を忘れて食い物に夢中になる彼女を呆れたようにじつと見ていた。

「にやーにやー、はっ！ こんな事で買収されてはいけないんです。さて、あらためて……」己を取り戻しかける彼女に彼は無言で、次のものを放つてよこす。途端、彼女は「うにやーっ……」と気の抜けた声をあげたかと思うと夢見心地で彼にすりよっていった。

そこに「おにいちやん」という場違いな少女然とした声が響いた。

「私は考えました、ハーレム構築可能な吸血鬼、サディストの夢と言うべき肉体的特性を持つ葉月、ちよつときつめの風姉様、そして幼女趣味も死体趣味もないとなれば、……源十郎様の趣味^{このみ}は妹^{ちがい}に相違ありません！ 当然、設定は義理です」ビシッ！！ と指差すその先では、誰が見ても誤解の余地のないような格好で二人がからまりあっていた。

「……な、ななな、何をしているんですか源十郎様っ！」

「ん、大きな猫に構っているだけだが……」

その誤解も弁明の余地も無いような格好で、彼は何の動揺も見せず一言、そう、言い切った。

「げ、原十郎様、それはあれですか、妹とかなんとかというか、そういう設定のその前に、この身体に女としてのポリュームが足りない、と、そう、言うことなんですか……」自分の明らかに女性としての曲線に欠ける身体と源十郎に可愛がられているような少女を見つめ少女は、落ち込んだ声で言う。

「くくく、屈辱的なのですよ、でも、こんなことでめげてないのですにや」そこにふと、我に返りかけたらしい猫少女の声がして、
「う、うにや……」再び男に何かを嗅がされ、その決意も虚しく男に弄ばれる。

「……何をしたんですか？」

「またたびを嗅がせて見たんだが、化け猫にもやはり効くんだな」

「ま、まあそれは良いとして……、いったいソレは、なんなんですか？」そこから、無理矢理視線を引き剥がすようにして疑問符を投げかける。

「たぶん、暗殺者だろうな。まあ、性質からして化け猫というのは向いているんだろうが……」言いつつ、疑問符付きの視線でその化け猫の喉を誘惑に負けたように撫でる。

「はっ！！ こんな事ではいけないのですにや、今回はこのへんで勘弁してやるのですにや」三度我に返った少女は、^{みたひ}ようやく男から逃げるように走り去った。その途中で、地面に顔面からダイビングしたのはご愛敬である。

「……ところで、その格好は？」微妙な沈黙が訪れ、その見慣れない服装をした少女を見遣り、少々呆れ気味につぶやく。

「いいい、言わないで下さい、ちょっとした嗜好の発露っていうかなんというか、…乙女の秘密です」

「…そうか」いつにも増して彼女の少女然とした姿を協調する姿を上から下まで見やり、一言ぽつりと言って、彼は再び残りのサンマを焼く作業へと戻った。

再び言い様のない沈黙が訪れ、その側を通り過ぎようとする少女の背中に「…おまえはそのままで良い」という声がかけられるのだが、追い打ちのような前半の一言のせいで、少女に彼の言いたいことの全ては伝わらなかった。

花咲く家の中 1

「むー、むー、失敗なんですにや、せつかく二股になってからの初めての仕事なのに、なんか上手くないですにや、こんな事では立派な化け猫になるのはほど遠いですにや、早く無事に一目標を殺して（依頼を果たして）、ご先祖様のように語り継がれる立派な化け猫になるのですにや」

「その為に暗殺のテキスト、”君ももうこれで立派な人殺し”をもう一度、熟読するのですにや」

*

「心得その巻、まず標的^{ターゲット}を知れですにや」

A・M・4：00

ターゲット

標的起床ですにや、眠いですにや、なんか袴姿の美人とかに起こされているですにや、もしかして、この若さで結婚とかしているですか、…って、標的情報に書いてあるですにや、三剣の一体^{ひとつり}、神風^{かなざき}ですにや、…防御に関して鉄壁、ただし標的に危害が加わらない限りは無関心、弱点無し、…って、絶望感深めてどうするかですにや、…役に立たないですにや…

A・M・4：30

続いて、先程の少女が現れ、男が少女を作業台の上に載せ、その服を剥ぐ、…って、にやにや、にや、にや、…ここから先は未成年禁止領域ですかにや、朝っぱらから、何やらかすかですかにや、あの男は、…って、ああ、そんな所まで、…って、よく見るとあれも人形ですにや、…あれが、神無だったですか、…常にターゲットの

側にいるので、障害ランク第一位ですにや、能力は、他の人形との融合、状況対応能力 LANK A、状況判断能力 LANK B 通常状態戦闘能力 LANK D、すごいんだか、すごくないんだか、よくわからないですにや…」

花咲く家の中 2

A・M・5:00

「むむむ、犬小屋に向かっていくですよにや、むゝ、犬飼ってるかですにや、難易度が上がったですよにや、にや、にやにやにやんですか、あれは、人間ですよにや、人を犬小屋で飼うなんて、なんつー人非人ですかっ！！ あれは、むゝ、抱きつかれてるですよにや、首輪つけてるですよにや、鎖^{リット}つけてるですよにや、にやにやにや、変身したですよにや、犬、イヌ、犬！？ 引きずられていくですよにや、……ワールフ、如月 葉月、……狼？ 狼っ？？ にやあ？？？ あの態度は狼っていうか、もはやすでに犬……ですよにや」

A・M・6:00

「……ラジオ体操って、あの男がやると健康的っていうより、もはやなんかじじむさいですよにや……」

「……ん、なんか朝帰りしている露出度の高いお姉ちゃんがいるですよにや、標^{ターゲット}的見るなり、抱きついてる、かと思いきや、首筋に噛み付こうとしているですよにや、……あ、引き剥がされた。神無と神風に引き剥がされてるですよにや、……シエリル・アーシア、吸血鬼、……って吸血鬼い！？ 夜の眷属中、最高最悪の化け物、あまりの凶悪さ故に神をもつてしても陽の中を歩くことを制限するしかなかった吸血鬼ですか、……備考 ゲーム中毒、夜は仕事兼食事の為に不在の場合多し、出逢ってしまった場合は、……合掌って、なんですかこの不吉な墓場^{マイク}の絵は！？ ……絶望感いや増ししてどうするかですよにや……」

A・M・7:00

「ようやつと食事ですか、私もお腹空いてきたですよにや、みそ汁の良い香りと秋刀魚の臭いがあらがいがたい魅力を醸し出しているの

ですにや、まったく、こつちの気も知らずにいい気なものですにや、
……とりあえずこつちも朝ごはんですにや、…あんパン一個に牛乳
はわびしいですにや、あつたかいご飯^{まんま}が食べたいですにや、…あの
時の猫まんまは美味しかったですにや」

猫又さんがであった1

「では、教科書^{バイブル}、”あなたの為の簡単な暗殺法、これであの人もイチコロよ”に従って、外堀を埋めるためにさっそく目標^{ターゲット}の情報収集を開始するですよ」

クラスメイト
一般女子生徒、海月^{うみつき} 愛奈^{あいな}、小柄な甲高い声の持ち主のコメント
「幼女愛好趣味者？ でも、神無ちゃんて高校生だからギリギリセーフ？ なのかな…、そんな事より、その胸^{トランジスタグラマー}とか尻とか、どうしたらそうなるのか、ちよっとお姉さんに教えてくれない、いや、別にタダとはいわないからさあ」

「あの、その、何ですかニヤ、その獲物を狙うような目はですニヤ、その迫り来るわさわさしてる両手は何ですかニヤ」

「まずはその正確な感触^{データ}とか欲しいかなあ、なぐんで、大丈夫、痛くないから」

「ちよ、ちよっと待つですにニヤ、だいたいこんな身体、仕事上邪魔でしかないですニヤ、狭いところにはつかえるし、潜入工作には邪魔でしか無いですニヤ、わたしの方こそあなたのその機能的な身体が羨ましい限りですニヤ、どうしたらこれ以上成長しないようにできるんですニヤ、というか減らす方法は無いんですかニヤ、……

…ニヤニヤ？ どうか、したかですかニヤ」

「……、そう、そうなの、まだ成長しているのね胸^{ソレ}、機能的？

減らす方法？ なによソレ？ よくもそこまでバカにしてくれたもんだわね、遠慮は、当然、いらないわよね」

*

「つ、つぎにいくでづニヤ、危なかったですニヤ、危つく貞操の危機^機というか、もう少しで生命の危機を感じたですニヤ、接触までさ

れてしまうとは屈辱ですニヤ、……………思い出すと泥沼にはまるので、
つ、次にいくですニヤ」

一般女子生徒

服部 京子、笹岡 礼子、長山 澄

「ド変態?」「サディスト?」「なんか、後ろ暗い組織がバックにあるとかないとか?」「そうは見えないんだけどねー」「いや、でも本当の悪人は一般人のフリしているっていうし」「かたっぱしから口封じしてるんじゃないの」「一応、警察沙汰にはなって無いんだっけ?」「でも、どうみてもカタギじゃ無い女達が入りしてるって噂あるし」「あの屋敷、怪しいよね」

口を挟む暇も無いまま彼女達さんらの話題は、甘いモノとオトコの話題とかに移行して、「…………え、え」と、失敗ですニヤ」

猫又さんがであった2

柔道部主将 加納^{かのう} 虎次郎^{こじろう}、愛称トラさん

「害虫、以上」「あ、あの、それだけですかニヤ」「下衆^{ゲス}、人間未満、燃えないゴミ、人類の敵」「え、え」と「あなたがどのような理由からアレのことを調べているのかは知らないが、言うておくアレには関わるな近寄るな、存在すら認めるな」「そ、そういうわけにはいかないんですニヤ」「そうか、わかった。今は何も言うまい、準備が整っておらん」「ええと、ありがとうございますニヤ」「うむ、心穏やかに過ごすが良い、準備が整い次第、アレは抹殺、いいや、駆除しておく」「そ、それは困るんですニヤ」「そうか」「え、えと、ありがとうございますニヤ」「うむ」

「な、なんですかですかニヤ、あれは迫力ありすぎですニヤ、おもわずしつぽ巻いて逃げ出してしまったですニヤ、と、いうかアレは会話が成立していたんですかニヤ、有効な情報がいつこうに集まらないですニヤ、つ、次に行くですニヤ、落ち込んでもしようがないんですニヤ、ふあいとですニヤ」

手芸部部长 水無月^{みなづき} 聖歌^{せいか}、別にどこぞの十字教徒ではないぞ、と名前についての本人注釈^{コメント}つき、眼鏡および三つ編みという絶滅危惧種のコメント

「身長178cm、体重58.5kg、所属部活、手芸部、副業フイギョア造り、および、その修復、改造、交友関係は意外と浅く広く、女子生徒の一部には悪いうわさが広まっているせいで敬遠されている。好きな食べ物、麺類、趣味 製作物一般、寡黙かと思うが喋るときにはしゃべる。超がつくほどの下戸で、飲むと熟睡する。いたずら書きするしか皆を楽しませる方法が無いとは、情けない。両親を幼い頃に事故で亡くしているせいか、自分の中に深くは踏み

込ませない感じがする。ん？ どうした、何を涙ぐんでおる？」

「感動の涙ですニヤ、ようやくまともな情報に巡りあえたですニヤ、もう少しはやくあなたに会いたかったですニヤ」

「それは重畳^{じゅうじやう}、ところでその猫のコスプレとわざとらしい”ニヤ”は源十郎君の趣味かね、あの男の周りには面白いのが揃うな、その動く耳といいシッポといい、良い仕事だ。うむ、制作意欲がわいたぞ、次回の新作はソレでいくとするか、細かいところは 彼と打ち合わせるとして、さっそくイメージキャラクターに合う資料探しだな」

「…風のように去って行っただすニヤ、この学校にまともな人はいないんですかニヤ、くذけてしまいですにや^{マスター} 著者」

「と、とりあえず、^{マスター} 著者の言うとおり、^{ターゲット} 目標の情報を整理してみせるですにや、一言で言うならば、…女の敵！？ なんですかこの罵詈雑言の嵐は、…役に立たないですにや」そう言っ頭を抱える彼女の姿はととても愛狂しかった。

猫又さんの言うことにや

A・M・2:00

「よし、ようやく寝静まったですにや、紆余曲折よりみちが多すぎた気がしますが、再度ふたたび、侵入開始ですにや、侵入ルート確保、退路確保OKですにや」

気合いをいれて、潜り込み、「!!!!!!!!!!!!!!」数秒で凍り付いた。「び、び、び、びびび、びつ、くりしたですにや、何ですかこれは、こんなものを部屋の中に置いて置くとは良い趣味しているですにや、何かと思えば良くできた人体標本なのですにや、ふう、ふう、落ち着くですにや、わかってしまえばたいした事はないのですにや、幽霊の正体見たり枯おほな(か)れ一尾花なのですにや、……!? いま、なんか、動いた気配がしたのですにや」

「……、気、気のせいですにや、こんなものどうって事ないのですにや、理科室の標本と一緒にですにや、その証拠にこんな事しても大丈夫なのですにや」言つて、ぺちぺちとなぜかメイド服姿で壁に掛けられている その人体標本を触る。

「……しかし、よくできているのですにや、なんか、生暖かくつって生臭いですにや、……」ふっと、見上げればその物体と目が合ってしまった。「ききき、気のせいですにや、幽霊の見えると思うから見えるのですにや、こんな事をするものには、こうですにや、えい、えい、ねこパーンチ!!! ですにや」

「いゝたいです、いきなり何なんですかあ」

「オ、オ、オ、オバケですにや、確かに心臓は止まっているハズですにや、なんですか、これは？」

「なんですか? といわれても、浅野あしの 小夜子こよひさんです。端的に

「いうとお、2号さんです」

「ひいやああああ、ですにゃ」

「……人の顔を見ただけで驚くとは勝手に入ってきておいて失礼な人ですねえ」

「小夜子、皮膚の張り替え中だ、あまり動くな」そう言う彼女の半身は、めくれあがり、中身が見え、言うなれば、まさに動く人体標本、暗闇の中でこれを見て、びっくりするなというほうが、無理な注文ではあった。

「ななななんですか、あれは、情報ファイルになかつてですにゃ、あれあは。……！？ 補足 浅野 小夜子 活リビング・デッドきる死体 日中は地面に埋まって体細胞の活性化を行っている、現れるのは不定期、戦闘能力D、常人以下、ただし、死んでいるので殺すことは無理、追記：面倒だから関わらないこと、……って、なんなんですかこれは……」

猫又（おじょう）さんお待ちなさい

「うゝ、恐いですニヤ、恐ろしいですニヤ、ここはヤンですかニヤ、まったくもって化け物屋敷ですか？　ですニヤ？」などと自覚のないことをのたまう綾音の後ろに音もなく人影が立つ。

「また、あなたですか、葉月はお仕置きを期待して見過ごしますしわたくしとて、…先刻は小難と見逃しましたが、…主様の平穩を乱すというならば、見過ごすわけにはまいりません」こわごわと振り向くと、瞳を固く閉じた緋袴の巫女が、そう言いざま、星明かりを落とした小太刀を構える。

「……、にや、にやゝ！　三十六計、ですにや！！　にやにやにやつ！！　にやんで逃げられないですにや、にやんで目の前にいるですにや？」逃げようとする綾音の先々にまるでねらい澄ましたかのように神風が佇む。

「簡易結界、ですが…やはり杞憂でしたか、使うまでもなかったようですね、しかし悪い芽は早めに摘んでおけとも申しますし、申し訳ありませんが、大人しく死ぬ、抵抗して死ぬ、好きな方をお選びくださいませ、主様を狙うからには当然、その覚悟が無いとはいわせませぬ」

「……、にや、にやああゝ！　ごめんなさいですにや、もうしませんですにや、お助けですにやゝゝゝゝゝゝ」身体を丸め、ひたすら謝罪する綾音の元に躊躇いなく刃が振り下ろされるが、想像した惨劇は起こらなかった。

「大丈夫かね、お嬢さん、まったく、危ないところであつた」その

白刃の下をくぐり抜け綾音かのじよを救ったのは、柔道部主将、いや、”神無ちゃんを救う会”会長の加納かのう 虎次郎こじろうであった。

男は、彼女を抱き上げ、神風を哀れみに満ちた目で見て言う。

「あの男に騙されているとはいえ、そこまでの暴行、見過ごすわけにはいかぬな」その姿は、彼のもともとの精悍さ溢れる容貌せうぼうもあいまって、まるで映画ワンシーンの一風景のように様になっていた、が、彼が柔道着とつぷくの上に着る法被はっぴの背に書かれた”神無ちゃんLOVE”の文字がその全てを台無しにしていた。

ラララ、ララララ、ラー

「また、あなたですか、この結界にまで侵入してくる貴方の意志の強さは、…ある意味尊敬に値しますが、主様との関係をあなたにとやかくいわれる筋合いはありません」凜として彼女は言い放つ。

「なぜだ、なぜ、そこまであの男につき従うのだ。理解出来ぬ」苦渋の表情で男は言う。

「理解してもらおうとは、思っておりませぬが、あくまで邪魔するといつのであれば、たとえ人間相手とはいえ容赦は致しませぬ」白刃を手に緋の巫女が、構えを取る。

「にや、にやにや!？」

「わかっておる。なにも言わずとも良い、君が嘗めた辛酸の数々、思うにあまりある。だが、もう何も心配する事はない」言って男は、少女を抱きしめる。そうして、腕の中の彼女をなで回し、「ううむ、この猫耳、しつぽの気違いじみたコスプレなど、まったく言語同断である。男の風上にもおけんやつめ!!」そう言う男のセクハラじみた行動に、綾音がいやいやをするように身をよじるが、対峙する二人の眼中には全く無いのだった。

「胡乱」音とともに、白刃がひらめく。しかし、そこに手応えはなく、「…手加減したとはいえ、これをかわすとは、ただの高校生と侮りすぎましたか」

「舐めてもらっては困るな、この数ヶ月、我々として何もしていなかったわけでは無い、フォー、レーションCイ!!」男の号令に応

えて暑苦しい男達おにいちゃんが集い、絶妙な連携をもって神風へと迫る。

「…無拍子むびょうし、円環えんかんの舞」その隙間を縫って女が微かに動き、男達が分けも分からぬままに地に伏せられる。地べたに円を描いて倒れ伏す一人の男の手の甲を足で踏みにじり、その全てを神風おんなは制圧する。

「ぬう、多数取りとは、お主何者だ」気圧された風に男が一步引く

「主様を護るただの従僕です」楚々として女は誇らしげに応える。

「…神風、開眼を許す」

「御意、無盾！！ 主様、安らぎを妨げて申し訳ありません」応える巫女の前に不可視の盾が展開され、飛び来る銃弾を弾き落とす。

「やれやれ、結局はこの大騒ぎかね、私は可及的速やかに沈黙の内に処理せよと言わなかったかね。綾音あやねくん、まあ、はじめからキミには期待しておらんかったが、ここまで騒ぎが大きくなるのとは予想外だ。まあ、どちらにせよまとめて始末するにはちょうど良いと、前向きに考えるべきかね。パペット・マスター、GENJYURO」

「そういう呼ばれ方は、好みではないな、久しぶりと言った方が良いか、妖異狩りヴァンパイア・ハンター」

ラララ、ラララのラー

「ピース・メイカー平和の担い手だよ。人形使い」男が言葉を発した瞬間、空気が変わる。

「けっかい…戦闘空間か、準備は万端というわけか」

「その通り、しばし合わない内に身内が増えたようだが、貴様さえ排除すれば問題は無い、それでは、この前の雪辱をはらせてもらおうか、人形遣い!!」

「主様、ご下命を、この一身を持って当たるが、我が幸い」

「が〜ん、ですニヤ、が〜んですニヤ、やっぱり、期待などされていなかったんですにや、やっぱりわたしはミソっカスだったんですにや」緊張した空気の中置いてきぼりを食らった綾音が、虎さんの腕の中で頂垂れる。

「おもちゃ…玩具の兵隊」言葉に応えて、小さな戦闘人形が、敵に群がる。が、その全てが届く前に空で叩き落とされる。

「何度も同じ手を喰うと思うかね」余裕釈とした様相で男が振り返る。

「さしたる手品ではない、少し反射速度をいじっただけだ、ただ少々尋常ではない手段を使ったがね」微妙にまなじりをつり上げた男に、妖気をまとった男が種あかしを告げる。

「語るに墜ちたか、妖異狩り」

「毒を持って毒を制すると、つまりそういうことだよ、源十郎」

「ならば、遠慮はいらないな」

「望むところだな、…吸血鬼^{シエリル}は、この昼日中には出てこられまい、ゾンビは戦闘には向かぬし、新月の人狼^{ハードウルフ}は無力、主戦力たる神無^{シヨウジツキ}はメンテナンス中、さて、どうするね」

無言で視線を交錯させる、主と敵の間に緋袴の巫女が立ち塞がる。

「ふむ、神凧と言ったかその人形は、朔夜^{サクヤ}の完成形とみるが、対策ならば、すでに」言う空間に銃弾の嵐が四方八方から吹き荒れる。

開眼した神凧が、それを絶対防御の結界で主他を背にかばう。

「こう、防御防御対象が多すぎると、無盾はつかえないか」

「主様、ただ一言私に御命じくださいませ、主様だけには傷一つ負わせませぬ」

「そうもいかんさ、寝覚めが悪いしな」

「むう、貴様が殺されるのは勝手だが、罪の無い一般市民を巻き込むな、とはいえ、何か手はあるのか源十郎、緊急時だ、協力してやらんことも無い」

「が〜ん、ですニヤ、が〜んですニヤ、やっぱり、期待もなにもされていなかったですよ、ミソッカス、ミソッカスですよ」

「主様、神裂しんせきがあれば、このような失態など犯さなかったものを、申し訳わけございませぬ」

「……まあ、言っても仕方がない、……そういえば杜若かきつばた 綾音あやめといったか、この妖猫むすめ」

「……確かにその娘は杜若かきつばたの化け猫だが、何を期待しているか知らぬが、無駄だぞ、そいつは真正銘最低ランクの妖猫だ」

黒い縁の落とし物

「ががが、がぐん、ですニヤ、ががが、がぐんですニヤ、わかつて
いたです。わかつていたです。それでも万が一の望みを、希望を抱
いていたです、だからこそ努力したです、マスター、あなたが差し
伸べて下さった手は私の一つの光明だったとです。それも幻でした
か、かくなる上は、かくなる上は、せめてせめて、掟に従いじじじ、
自決するですううう」顔中の穴から液体を吹きだし、綾音は、号
泣する。

「うむ、その方が始末の手間が省けるという物だ、気まぐれの余興
にしては楽しめたよ、綾音くん、せめてその命を賭した呪怨ぐらい
は失敗せずに発動させてほしいものだな、では、ゴミは放っておい
て続きといこうか、人形遣い！！」

おおつぶの涙を浮かべて震える手で自身にカタをつけようとする
少女の頭に上に、ぽんと暖かな手がおかれる。「杜若^{かきつばた} 綾音^{あやね} いま
お前の力が必要だと言ったら その力 貸してくれるか」

その言葉は、彼女自身にかけらの疑いもなくかけられた、彼女自
身の無力すら受け入れると だから彼女は、その囁きに頷いてしま
ったのだ。

「源十郎^{げんじろう}っ！！」「主様^{まさま}っ！！」「悲鳴^{ひめい}じみた二つの声が重なる。そ
の一つは純粹に彼女^{あやね}を心配する声、そしてもう一つは、なにかの焦
りを含んだ声だった。

「杜若 綾音、すでに呪怨^{えにし}は結ばれている。操術、身も心も委ねろ、
お前の全てを解放してやる。」

空気が変わる、一体、その身のどこにこれほどのものを隠し持っていたのかという妖気を纏い、一人の美女がその場に降り立つ、切れ長の瞳は細められ、自らを解放した源十郎おとしを殺気を持って睨め付ける。少女の頃にはその身に余った服から胸元を惜しげもなくさらし、鬚りの部分からのびる白い脚は、猫科の動物特有のしなやかさを持つて男達の目を捉えて離さない、その身にも向けられた銃弾を爪の一閃で払いのけ、そのいくつかを気まぐれのように源十郎に向かわせ、神風がそれを打ち払う。

黒い縁

「どお♪ しよつかなニヤ、どお♪ しよつかにやあああ♪ 今なら殺れそつな気がしちゃう、そのあと後ろのおじ様も惨殺とかス・テ・キつ、だって源十郎、呪怨解除しないまま解放しちゃうんだもん♪ だからこの姿になれたんだけど 今のわたし、源十郎を殺したい気持ちで一杯なのにやああ♪♪」

「そうか」一言、男は、目の前の美女の言葉を無視して、敵対する男の方に無造作に歩みゆく「にや！？ にやにやにや、なんてことしてくれるニヤ、無視するニヤ！！」抗議つつ源十郎に注がれる銃弾を綾音は弾き落とす。

「主様、この呪怨を利用すると、そうおっしゃいますが、化け猫（るぎアレ）を一剣とすると、また難儀な者を」

「今更だな、綾音、しっかりと護らないとお前以外に殺されてやるぞ」言いざま、彼は無造作に彼女の横を通りすぎ、敵に向かって歩みはじめた。

「むゝ、うゝ、むー、わかったニヤ、わかったですのニヤ、利用されてやるのですニヤ、呪怨を結んだまま殺されでもしたら、洒落にならんですニヤ」

「笑止、せいぜい主様の剣として折られないよう気をつけなさい」

「神風」

「御意！！」答える声は凜として、すかさずその一言で主の意を汲

む、「剣が剣として機能するならば、私は神の意すら風がせる盾となりましょうぞ」

「操術、杜若 綾音、その意は我が繰（く）り一意図の中にある」

「ニヤ!?」言葉は鎖となつて綾音のすべてを手中に「神裂、一の太刀」力ある言葉は暴風となつて、彼女の意志を一つの刃に集約する。自分の身に何が起こったのか綾音が認識する間もなく、彼女は一刃の風となつて、敵に殺到する。

身体中のありとあらゆる妖気を絞り出され、綾音は、意識を失い、その場に佇むのは、一人の巫女と男のみ「やはり一撃が限界か」「主様、命は守りました、誰一人傷つけることなく護りきつております。」誇らしげに彼女は言う。

余 陽だまりの中で

上気する巫女と男との交わりを邪魔するように影から声がする。

「やれやれ、今回は手ひどくやられてしまったが、手の内の一つは知れた事だし、まあ次回はもう少しうまくやるとするかね」

「次があると思いますか？」

「ああ、もちろんだとも、貴様達だとて、今は打つ手もあるまい、ゆるりと逃げさせてもらうさ」

*

余 日溜まりの中

緩やかな午後の昼下がり、小さな猫が、一人の青年の膝の上で丸くなる。清楚なる巫女が現れ、その傍らにお茶を置く、そして、その後ろから、神無のどんよりとした声が響く、「…膝枕、…膝枕、わたしですらそんな事やってもらった事ないのに…」その後、正気を取り戻した綾音は、その場に額をこすりつけながら喚くように言った。「数々の無礼と非礼をお許し下さいなのですにや、なんとお優しく、素敵な方なのですかニヤ、杜若 綾音、あなた様に惚れたのですニヤ、あなたのもとにいれば、私でも、きつとお役に立てる気がするのですニヤ、ご恩返しをせねばならないのですニヤ、猫又一族の厳しい厳しい掟ですのニヤ」そうして、新たなる居場所を確保した子猫^{あやね}は、主の膝の上、心地よく寝言をたらす「ここは気持ちがいいのですにや、ここはいここちがいいのですにや、ようやくみつけた、私の居場所なのですニヤ、ここは譲れないのデスにや」

日溜まりの中、静寂が破られ、女達の日常^{たにかい}が始まるのはいつもの事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9869c/>

ねこねこねこ - 人形師 源十郎 -

2010年10月9日11時06分発行